

高句麗太王陵出土銅鈴の釈読について

篠 原 啓 方

Interpreting Inscriptions: the Goguryeo-period Copper Bell from the Taewang Imperial Tomb

SHINOHARA Hirokata

While only twelve characters were engraved on the surface of a small copper bell from the Goguryeo period that was discovered in the Taewang imperial tomb in Jian City, the inclusion of three characters, 好太王 *hotaewang*, make this bell a document of great historical importance. There are various suggestions for one of the characters in this inscription. This author argues that one of the characters is 教 from its similarity with the 漢簡 *han wooden strips* script style.

キーワード：好太王、銅鈴、太王陵、高句麗、集安、積石塚、広開土王、漢簡

はじめに

文献史料が少ない高句麗において出土文字資料は貴重な存在である。その高句麗の王陵と考えられている太王陵の発掘において、12の文字が刻まれた銅鈴が見つかった。「好太王」という王号が入った重要資料であり、既に数名の研究者によって釈文が出されている。本稿はそれらの研究を基に、筆者の釈文を示すものである。

一 発見の経緯と釈文

この銅鈴が発見されたのは2003年で、報告書によると出土位置は「太王陵の墳丘南辺の基底部から2.9m離れた場所で、トレンチ（SG1）の中間あたりの西側」であるという¹⁾。

太王陵（禹山墓区第541墓，JYM0541）は、中国吉林省集安市にある高句麗古墳（積石塚）であり、その巨大さから王陵と考えられている。太王陵の名は「願太王陵安如山固如岳」の銘が入った磚が見つ

1) 吉林省文物考古研究所・集安市博物館『集安高句麗王陵—1990～2003年集安高句麗王陵調査報告—』（文物出版社，2004）。以下報告書と略す。

ったことに由来する²⁾。被葬者については、故国原王（在位331～371）、故国壤王（在位384～391）、広開土王（在位391～412）、長寿王（在位413～491）などの諸説があり、近年は考古学の立場から、長寿王説を支持する見解が多いように思われる。

銅鈴のサイズは長径2.9cm、短径2.5cm、高5.2cmで、錆や破損があるものの、状態は良好と言える。銘文は銅鈴の外面に鑿刻されており、文字の見やすさを考慮してか、白色顔料が塗布されている（図1）³⁾。発掘報告書に掲載された釈文は（図2）の通りである。釈文は、2-②と3-①を除いて異見がない。



図1 太王陵出土有銘銅鈴

字句を見ていこう。辛卯年は、被葬者にかかわる時期に限定すると、331年、391年、451年に該当する。2-②の釈文は、「太」と「大」に分かれる。「太王」とは当時の高句麗の君主号であり⁴⁾、5世紀の金石文に登場するが、数から言えば「大王」よりも「太王」が多い。

問題となる未釈の3-①は、これまでに「巫」⁵⁾、「所」⁶⁾、

4	3	2	1	
九	□	好	辛	①
十	造	大	卯	②
六	鈴	王	年	③

図2 銅鈴の釈文

2) 銘文塚は19世紀後半に日本にもたらされ、その後日本人研究者によって命名された。塚の発見経緯については武田幸男『高句麗史と東アジア』（岩波書店、1989）、256～257頁

3) 報告書（2004）、巻末図版八一

4) 太王については王の尊称であるという見解と、独自の君主号だとする見解がある。筆者の見解は後者に属する。

5) 白承玉「『辛卯年銘青銅방울』과 太王陵의 主人公」（『歴史斗 境界』56、2005）、143頁

6) 趙法鍾「中国集安博物館好太王銘文방울」（『韓国古代史研究』33、韓国古代史学会、2004）、375頁。徐榮洙「広開土太王碑의 再照明」（『史学志』38、檀国史学会、2006）、259頁。武田幸男『広開土王碑との対話』（白帝社、2007）、306～307頁

「正」・「止」⁷⁾などが釈文として出されている。いずれも微かな鑿刻から字画を読み取り、文脈や製作背景などを考慮して提示されたものである。

その後2006年1月、中国吉林省で発行される歴史雑誌『東北史地』（2006年第1期）に、銅鈴の拡大写真が紹介された（図3）⁸⁾。新たな写真を見る限り、銅鈴に白色顔料が新たに加えられた様子はなく、報告書のものと大差不ないように感じられる。だが写真と実物の観察に基づいた臨摹から字画が追加で確認され、それにより「峻」という新たな釈文が提示された⁹⁾。追加された字画は、従来の釈文の下部において確認され、これが事実であるとすれば、釈文の是非を問わず、報告書の写真に基づいた釈文はいずれも成立しないことになる。ただこの新釈以降、これに対する賛否や、新たな釈文の提示はないように思われる¹⁰⁾。本稿ではこの新釈を検討し、合わせて筆者の私釈を示したい。



図3 新たな写真

二 釈文の検討

1. 新釈の検討

『東北史地』には銅鈴の写真が数点掲載されており、大いに参考となる。参考となるのは、巻頭のカラー図版五～八、および論文である¹¹⁾。3-①の写真は図版五・六である。

論文によると、撮影条件は「1240万画素のD2X、ISO100、三脚使用、自然光、ホワイトバランスはオート、F値34、シャッター速度1/15」であったという。残念なことに図版五～八はいずれもピントが合っていないが、報告書の写真や図版が小さかったため、考察の条件は向上したと言えよう。ピントのブレは写真自体ではなく印刷技術に原因があるのかもしれないが、いずれにせよ、より明瞭な写真の提供が望まれる。

前述のように、新釈の根拠となるのは臨摹である（図4）¹²⁾。論文を基に新釈を解字すると、図5のようになる。字画を満たしていると言えるが、左部の山が小さく不自然にも思われる。

また論文では、「峻」と読み得るもう一つの根拠として、太王陵で見つかった銘文磚の「峻」字を挙げる（図6）¹³⁾。拓本では確かに「陵」の左部が「山」のように見え、明らかに他の銘文磚に見える「陵」

7) 東潮「高句麗王陵と巨大積石塚——国内城時代の陵園制——」（『朝鮮学報』199・200），18頁

8) 張福有・孫仁杰・遲勇「朱蒙所葬之“竜山”及太王陵銅鈴“峻”字考」（『東北史地』2006-1，東北史地雜誌社，2006）

9) 張福有ほか（前出論文），23頁

10) 李道学は釈文を出してはいないものの、「（過去の）辛卯年に、好大王の□が造った鈴，九十六」とし（『集安地域高句麗王陵에 관한 新考察』『高句麗渤海研究』30，2008，103頁），未釈字に製作者が入ると推測している。

11) 表紙の写真は，報告書のスキャン画像と臨摹をパソコンで加工して貼りつけたものであり役に立たない。

12) 『東北史地』2006-1（前出書），巻頭図版五

13) 図は報告書（2004），320頁および巻末図版一一一

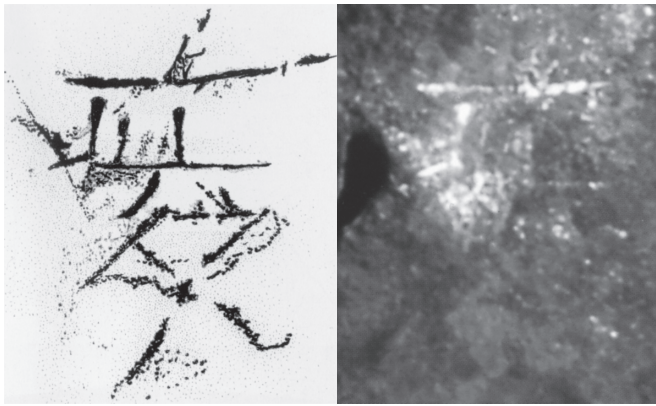


図4 3-①(左が臨摹、右が写真)

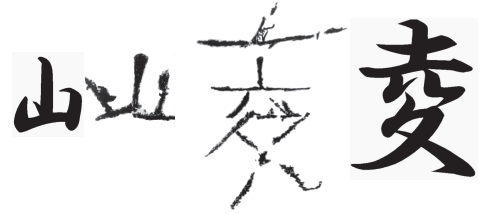


図5 「峻」の解字

とは異なり、「峻」の可能性は高いと思われる。陵墓にかかわる銅鈴と考えられる以上、峻の文字が登場するのは自然だと言えよう。

ただ問題となるのは釈読である。埴銘は「太王陵の安きこと山の如く、固きこと岳の如きを願う」と文章として成り立っている。一方銅鈴については、論文では「辛卯年、好大王峻（のために）造りし鈴」とする。だが「辛卯年」と始まる文において、主語が不在である点はやはり腑に落ちず、釈読において「～のために」を補わなくてはならない点も不自然さが残る。そこで別の文字の可能性を考えてみたい。



図6 「太王陵」銘埴

2. 私釈

臨摹は言うまでもなく二次史料であり、そこに根拠を求めることには不安が残る。ただ「峻」の右下部分にあたる「久」は、写真においても微かではあるが、新写真から痕跡が認められる。そもそもこの臨摹は、誰もが「峻」と読み取れる字体とは言い難く、峻と読ませるための恣意的なものとも思われな

い。従ってこの臨摹には、ある程度の根拠を認めてもよいと考えられる。

この旧写真の下部に新たな字画を指摘した点は、臨摹の大きな成果である。これが認められるとすれば、3-①の最後は「久」もしくは「夨」であった可能性が高い。それに基づき、筆者が提示したいのが「教」である。「教」とは、当時の高句麗における王言、つまり高句麗君主の言葉、命令をあらわす表現であり、「広開土王碑」や「中原高句麗碑」をはじめ、5世紀の高句麗金石文に多く見られる¹⁴⁾。銅鈴の

14) 教は広開土王碑文（414年）に7回、中原高句麗碑文に6回、牟頭婁墓誌（5世紀前半）に3回登場するが、いずれ

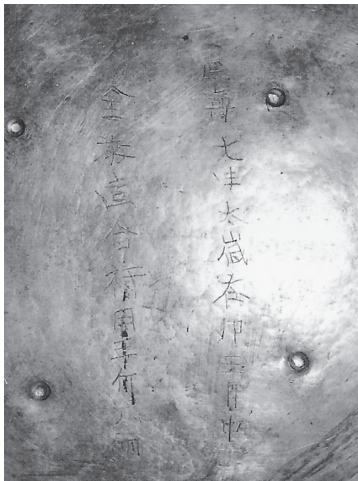


図7 瑞鳳塚出土合杆銘文（蓋内。右は「太王教造」銘）

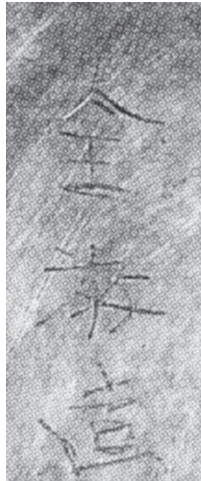


図8 瑞鳳塚出土合杆銘文（外底。右は「太王教造」銘）



文脈から見ても、「好大（太）王が教して鈴を造らしむ」となり自然である。実は3-①が「教」である可能性は、既に指摘されていた¹⁵⁾。しかしこの時は旧写真に依っていたため、字画が確認できなかったのである。

「教」の中でも特に「教造」として登場するのが、韓国慶州の瑞鳳塚から見つかった銀製合杆銘である。既存の釈文と変わらないが、私釈は「延寿元年太歳在卯三月中／太王教造合杆用三斤六両」（蓋内、図7¹⁶⁾）、「延壽元年太歳在辛／三月□太王教造合杆／三斤」（外底、図8¹⁷⁾）である。「延寿」はいわゆる中国王朝の年号ではなく¹⁸⁾、高句麗独自の年号と考えられており、干支年「辛卯」は451年に比定されて以来¹⁹⁾これを支持する研究者が多く²⁰⁾、筆者も同様である。「教」については「敬」と読む意見もあるが²¹⁾、字画や文脈からみて「教」がふさわしいと考える。

ならば、銅鈴の文字を「教」と読むことは可能であろうか。「教」は「孝」と「攴」を組み合わせた文字であるが、3-①は「攴」がかなり下部に位置している。そうした字体が存在するのかどうか問題となろう。筆者が調べたところでは、漢簡に数例を求めることができた（図9）²²⁾。

も高句麗王の言葉、命令である。中原高句麗碑の成立年代については諸説があるが、筆者は碑文の内容及び立碑の年代を5世紀中葉と考えている。「[中原高句麗碑]의 釈読과 内容의 意義」（『史叢』51，高大史学会，2000）

15) 白承玉（前出論文），143頁。東潮（前出論文），18頁

16) 図は国立慶州博物館『文字로 본 新羅』（特別展図録，2002），11頁

17) 図は国立慶州博物館（前出書），11頁

18) 高昌国において7世紀（624～640）に使用されているが、瑞鳳塚の出土遺物とその編年からみて、7世紀とは考えられない。

19) 李弘植「延寿在銘新羅銀合杆에 대한 一・二의 考察」（『韓国古代史의 研究』，新丘文化社，1971），465頁

20) 武田幸男（前出書，1989），260～261頁

21) 李弘植（前出書），464頁。東潮「高句麗王陵と陵園制」（『高句麗王陵研究』，東北亜歴史財団，2009），159頁

22) 9-1と9-5は勞幹編『居延漢簡 図版之部（一）』（中央研究院歴史語言研究所，1957），531頁「18.2」。9-2は「西漢・敦煌馬圈湾木牘」（馬建華主編『河西簡牘』，重慶出版社，2003），58頁。9-4は甘肅省文物考古研究所ほか編『居延新簡』（中華書局，1994），EPT2.5B。9-3は銅鈴3-①の臨摹である。



図9-1 居延漢簡「教」



図9-2 敦煌漢牘「教」



図9-4 居延漢簡「教」



図9-5 居延漢簡「教」

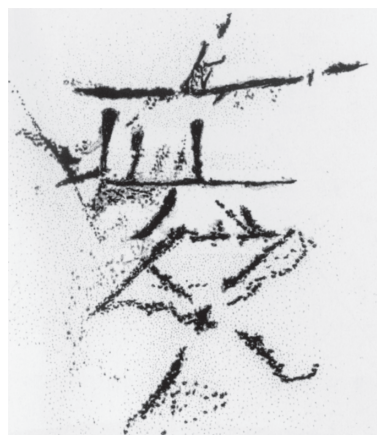


図9-3
太王陵銅鈴3-①



図10 敦煌木簡の「穀」



図11 敦煌木簡の「殺」



図12 「教」の解字

これらは隸書の略体，もしくは崩れた字体で，草隸と呼ばれている。なお「教」の類例として「穀」(図10)²³⁾，「殺」(図11)²⁴⁾を挙げたが，太王陵銅鈴銘文の文脈からすれば穀や殺が入るとは考えられず，「教」と見て問題ない。これに基づき，3-①を解字したものが図12である。「孝」の字画が正字体と完全には一致しないものの，おおむね無理なく収まり，上下のズレも漢簡の例と大差ない。

ただ他の文字がおおむね隸体であるのに対し，なぜ3-①のみが草隸に近いのか，という疑問が提起されよう。これについては，まず書者が「教」をどの書体で記憶していたのか，もしくは「教」の書体を使い分けられる専門知識を身につけていたのかどうか，といった点が問題となる。現時点でこれを明ら

23) 「漢・敦煌馬圈湾木簡」。馬建華主編（前出書），110頁

24) 「漢・敦煌馬圈湾木簡」。馬建華主編（前出書），95頁

かにし得る資料はないが、ただ書者について言えば、彼等は必ずしも高い水準を有していたわけではなかった。例えば広開土王を讃える内容が刻まれた「広開土王碑文」は、漢隸を基本としつつ行書や草書の勢が見られる独自のものであり²⁵⁾、現代の書家にも高く評価されている。一方で瑞鳳塚銀製合杆銘（図7, 8）は、鑿刻技術が稚拙で、字画の省略や崩れが見られる。銅鈴銘においても、その文字は決して流麗とは言えず、鑿刻技術も稚拙であり、3-①においては「教」・「峻」のいずれの文字であっても当時の通行体とは言い難い。このように、彼等はいずれも高句麗の君主（太王）にかかわる文字を残した者であったが、その水準にはかなりの差があり、一様に書体や刻字の高い専門知識を有していたわけではなかった。その点を考慮すれば、書者の水準に伴う書体の不統一や崩れは十分にあり得ると言えよう。

最後に2-②をどう見るか、つまり「大」か「太」かについてである。韓国の学界では「大＝太」に通じるとし、銅鈴の文字を「大」とする見解が多いが、「太」の可能性を提起する見解もある²⁶⁾。確かに新旧の写真から「丶」の画を見出すのは困難であるが、金石文の例から考えると、「太」と読むべきだと考える。

以上の検討に基づいた筆者の釈読は、「辛卯年、好太王が教して鈴九十六を造らしむ」、あるいは「辛卯年、好太王が教して造らしめた鈴、九十六」となる。「九十六」は多くの指摘のように銅鈴の数と思われる、96番目の銅鈴、あるいは製作された銅鈴の総数の意であろう。ただしその数は銅鈴の個数ではなく、セット（一式）の可能性もある。

おわりに

以上、太王陵において発見された銅鈴の釈文について、新たな写真と臨摹を基に、筆者なりの私釈を提示した。ただ釈文の根拠は一次史料に基づくものではなく、今後さらなる検討が必要である。より鮮明かつ原史料に忠実な写真資料の提供が求められる。

25) 福宿孝夫『日本古器銘と好太王碑文』（中国書店、1991）、216～262頁。高光儀「書체를 통해서 본 高句麗의 正体性—広開土太王碑의 形成을 中心으로—」（『高句麗研究』18、高句麗研究会）、1066～1068頁

26) 武田幸男（前出書、2007）、306～307頁

